

『全体新論』と『解体新書』（重訂版を含む）との語彙について
——日本の洋学から中国への影響の可能性

舒 志田

要 旨

日中近代語彙交流史の研究に於いて、明治維新以前に日本語から中国語への影響は余りないとされている。従って、それまでの日中間の文献に発生した新漢語が、同形であれば、即座に偶然の一致などに見なされがちである。

しかし、小論において中国後期洋学書の『全体新論』（1851）の語彙を、近世日本医学書の『解体新書』（1774）及びその改訂版『重訂解体新書』の語彙と対照して考察した結果、「眼球、採聴、精囊、大腦、小腦、牙床、涙囊、涙管、胆管、尿管、坐骨、上臂骨などの語は、中には直訳による偶然の一致も考えられるが、一方、『解体新書』の漢文体翻訳の趣旨（＝是は乍不及運に叶ひ、唐迄も渡候ば、其節之為にと存、唐音書に仕候。玄白・和蘭医事問答による）や、当時の中国プロテスタント宣教師らの翻訳事情から、上記の訳語の一致は日本側からの影響による可能性も完全に否定することはできない、という結論に至った。但し、この考えに対して今後、人的・書物交流面からの更なる検証が必要である。

1 はじめに

近代において、日本と中国はともに西洋文化の波寄せを受けて、社会・文化など多くの面で変化を余儀なくさせられたのである。言葉の面でも、押し寄せてきた新しい事物や概念に追われて、数多くの新語が作られ、両国それぞれの言語体系、特に語彙体系に大きな変化をもたらしたのである。新語生成の際、同じ漢字文化圏にある日本と中国との間で、同一の事物または概念に対して、しばしば共通したり或いは共通しなかったりする漢字表記語を当てることがある。また、お互いに新造語を借用したりすることもある。こういった近代翻訳漢語の生成及び日中間における交流についての研究は近年盛んに行われているが、日中近代語彙交流史の研究において、明治維新以前に日本語から中国語への影響は余りないとされている。

19世紀半ばころ（幕末）までは、日本独特の文物、制度を表す以外に、中国語が必要とし、借用する可能性のある語はまだ非常に少なかったと言えよう。日本独特の文物、制度を表す語についても、中国人一般の日本に対する無関心が原因で、実際には借用が行

われなかった。

(沈国威1994『近代日中語彙交流史』笠間書院、pp85)

従って、それまでの日中間の文献に発生した新漢語が、同形であれば、即座に偶然の一致など見なされがちであった。

日本書の中国流入は、19世紀末まで極めて希な例である。(中略)このような状況は1860年代の後半まで続いたと考えている。これはつまりそれまでに発生した新漢語が、同形であれば、偶然の一致によるものか、日本語が中国語から借用したものかのどちらかである。

(沈国威1998「新漢語研究に関する思考」『文林』32号)

近年の研究で、「半島」の例で見られるように、日本製新漢語の中国語への流入はロプシャイトの華英字典(1866-69)まで遡って考える必要が出てきたと言われている*¹。これより更に前に溯るケースは、今まで報告されていない。

しかし、筆者が中国洋学書の『全体新論』(1851)の語彙を、近世日本医学書の『解体新書』(1774)及びその改訂版『重訂解体新書』の語彙と対照して考察した結果、ロプシャイト以前の中国洋学書に日本語からの影響がある可能性を完全に払拭できないという結論に至った。以下、具体的にその考察過程を示してみたいと思う。

2 『全体新論』及びその著者について

『全体新論』はイギリスのロンドン会に所属する宣教師ホブソンが中国滞在中に書いた生理学の入門書である。ホブソンの事績については、詳しくは吉田寅1986「中国医療伝道とホブソンの中国医学書」(『幕末期医学書復刻II 解説』、教育出版センター)などを参照されたいが、ここで、彼の簡単な年表を掲げておく。

表 1: ホブソン年表

年次	主な出来事
1816年1月2日	イギリスの Wellford で生まれる。
1839年12月18日～1843年初	マカオに在住
1843/初～1845年	香港に在住
1845年～1847年7月	夫人が病気のため、イギリスに一時帰国。
1847年7月	香港に帰着
1847年10月	Gillespie と一緒に広東を訪れる。
1848年2月	広東に移住
〃4月	施療所開設
〃6月	恵愛医館開設

1851年	『全体新論』を上梓
1854年末	病気のため上海で休養
1856年10月	香港に戻る。
1857年2月	上海に移住
1857年末	上海仁済医館の管理に当たる。
1859年初	上海を出て、3月にイギリスに帰る。
1873年2月16日	逝去

ホブソンは中国で医療伝道を行う傍ら、多くの中国語医学書を著した(表2—ホブソン中国語著作リスト—を参照)。『全体新論』はいわゆるホブソンの五種医学書のうちで、最初に書かれたものである。これらと別に彼は『医学英華字積』(Medical Vocabulary in English and Chinese. p.75, Shanghai Mission Press, 1858.)という医学用語集をも著しているが、本稿で敢えてこの辞書を対象とせず、本書を選んだのは、具体的な文脈の中で各語の意味・用法をより正確に把握したいと考えたからである。

表 2: ホブソンの主な著作

書名	刊行地	刊行年代	和刻本刊年	簡単な内容紹介
1 恵愛医館年記	広東	1850		恵愛医館の年報
2 全体新論	広東	1851	越智蔵版 1857 二書堂版 1857	生理学
3 上帝弁証	広東	1852		神学上の弁証
4 約翰真經釈解	香港	1853		ヨハネによる福音書の注釈
5 祈祷式文	広東	1854		祈祷の形式
6 問答良言	広東	1855		キリスト教の教義問答書
7 信徳之解	広東	—		信仰の解説
8 博物新編	広東	1855	官版博物新編	博物学
9 聖書挾錦	広東	1856		聖書の抜粋
10 古訓撮要	広東	1856		中国古代の格言
11 基督降世伝	広東	1856		キリストの降臨話
12 聖地不収貪骨論	広東	1856		
13 聖主耶蘇啓示聖 差保羅復活之理	広東	—		復活之教義
14 詩篇	広東	—		

15 論仁愛之要	広東	—	
16 西医略論	上海	1857 桃樹園三宅氏蔵版	1858 外科医学
17 婦嬰新説	上海	1858 桃樹園三宅氏蔵 天香堂蔵版 1859	婦人科と小児科
18 内科新説	上海	1858 桃樹園三宅氏蔵版 香堂蔵版 1860	1858 天 病症論・薬剤論
19 医学英華字积	上海	1858	医学語彙集

『全体新論』は咸豊元年(1851)に初版、広州恵愛医館が出版元で、その後、咸豊三年(1853)、咸豊八年(1858)にそれぞれ、上海墨海書館と上海済仁医館によって再版された。また、咸豊二年(1852)に『海山仙館叢書』にも収録されていた。日本にも早く嘉永末年頃には将来されたい²⁾。なお、日本における流布本及び和刻本の所在については、八耳俊文1995を参照されたい。

本稿で利用したのは、九州大学筑紫文庫所蔵の越智蔵版和刻本『全体新論』である。安政四年(1857)の翻刻で、乾坤二冊からなる。その内容構成は以下のようになっている。

序／全体新論例言／全体新論目録

第一身体略論／第二全身骨体論／第三面骨論／第四脊骨脇骨論／第五手骨論／第六尻骨盤及足骨論／第七肌肉功用論／第八腦為全体之主論／第九眼官部位論／第十眼官妙用論／第十一耳官妙用論(以上「乾」)

第十二手鼻口官論／第十三臟腑功用論／第十四胃経／第十五小腸経／第十六大腸経／第十七肝経／第十八胆論／第十九甜肉経／第二十脾経／第二十一心経／第二十二血脈管廻血管論／第二十三血脈運行論／第二十四血論／第二十五肺経／第二十六肺経呼吸論／第二十七人身真火論／第二十八内腎経／第二十九膀胱論／第三十溺論／第三十一全体脂液論／第三十二外腎論／第三十三陽精論／第三十四陰経／第三十五胎論／第三十六胎盤論／第三十七乳論／第三十八月水論／第三十九靈魂妙用論(以上「坤」)

3 『全体新論』の使用語彙の抽出

語彙抽出にあたっては、同じく安政四年に二書堂発兌の和刻本と『海山仙館叢書』所載の十二巻本も参考にして、医学語彙を中心とした。なお、便宜的に、抽出した医学語彙を次のように分類してみた。A類：人体各部位、器官、組織などの名称；B類：各部位、器官、組織の形状や作用を表すもの。

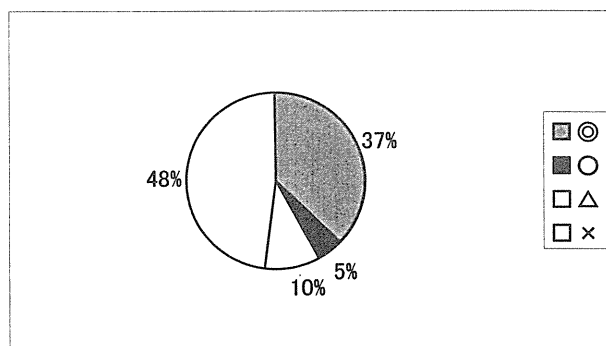
例えば、「世上萬類、以人身為最奇、不論内外、皆有皮膚、遍布外体為外皮、分布臟腑為内皮。」と綴られた本文の冒頭から、A類—「人身」「皮膚」「外体」「外皮」「臟腑」「内

皮」；B類—「分布」というように語を抽出した。このようにして、それぞれA類367語、B類113語、計480語を得た。

4 抽出語彙の出自

上記の抽出語彙の典拠を、『大漢和辞典』と『漢語大詞典』によって調べてみた。両辞書のどちらかに出典あり、かつ現代語との間に意味・用法の相違があまりないものには、□印を付けた。出典があるものの、意味用法において違ったりするものには、○印を付けた。両辞書に見出し語として掲載されているが、出典が明記されていないものには、△印を付けた。見出しさえないものには、×印を付けた。これで抽出語彙480語の内訳を見ると、◎179語、○22語、△47語、×232語という分布になる。

<図示1>抽出語彙の出自



◎印が付いた以外のものは、何れも「新漢語」である可能性があると考えられる。勿論、このやり方はあくまでも一つの目安である。実際、典籍に用例が確認されても両辞書には収録されていない語もある（後述）。

4-1. 漢籍の在来語との関係

在来語（◎印が付いたもの）がかなりの割合（37%）を占めているのは、ホブソンは、もともと「中国医学の伝統を尊重しつつ、西洋の近代医学を導入しようとする立場をとっており」³⁾、その訳語も在来の漢方の用語を多く取り入れているからである。

また、『大漢和辞典』や『漢語大詞典』に出典指示がなく、新造語かと疑われる例（□、×印が付いたもの）も、調査を進めてみると、洋学書関係以外の漢籍に既に使用されていたというものもあった。例えば、「横骨」「心胞」「脂膜」などがそれである。

4-2. 中国初期洋学書の用語との継承関係

『全体新論』の医学用語のうち、「膈膜」「脆骨」（「軟骨」のこと）などのように、初

期洋学書の用語を継承した痕跡が見うけられる^{*4}。本書以前に、『泰西人身概説』（1623）『人身図説』『五臓軀殻図形』といった西洋医学関係の著書がある。これらの医学書の話彙について、沈国威1997、2000では少し論及しているが、その全貌は未だに明らかになっていない。

4-3. ホブソンの新造語

『全体新論』の「凡例」で、用語について、著者が次のように断わっているものがある。

- 是書全体名目甚多、其為中土所無者間作以新名、務取名実相符、閱者望毋以生造見棄。
- 是書文意、其与中国医書暗合者、間或引用数語、其不合者不敢混入。

人体に関する名称が多く、そのうち、中国にこれまで命名がないものには、できる限り相応しい新名をつけた。また、中国の従来の医学書からはその内容が本書で述べようとするものと一致したものだけ、「数語」を引用したと述べている。

前掲の図示1のグラフで分かるように、抽出語彙の大半は『大漢和辞典』や『漢語大詞典』には見出しまたは用例が見られない。×印の語だけでも48%に達している。これらは全てホブソンによる新訳語・新造語とは限らないが、彼が初めて命名したものが数多くあることは間違いない。例えば、「真皮」は『大漢和辞典』や『漢語大詞典』に出典を確認できず、しかも現代日中両言語に於いて、共通の意味で使用されている語であるが、『全体新論』の中で既に現代語のそれと同じ意味で使われている。

- (1) 凡人唇舌十指之内、腦氣筋比他处尤密、若割開用顯微鏡細驗、見真皮之上、有小尖粒甚多。每粒之内有腦氣筋紐屈如糸、層疊向外。 (手鼻口官論)
- (2) 人身真皮之外有薄皮或名皮膜、周圍蓋護、常生常脫。若手足用力之处、漸成胼胝。其真皮之中、有微糸血管發汗管吸水管毛管油管極多、其下始有肥脂網膜。 (同上)

後に、韋廉臣、艾約瑟訳、李善蘭筆述の『植物学』（1869）に、植物の皮の構造を表すのに「真皮」という語が使われたこともある。

- (3) 子為真皮

ついでに、『解体新書』を見ると、現在で言う「真皮」のところに、「次皮」の訳を宛てている。

- (4) 次皮。厚如革。而能擁護身体。神經血道及筋之細絡。相錯如織。熟視之則有乳頭狀微小者。是汗孔与機里爾也。 (解体新書・卷二・頭並皮毛篇)

後の日本側の資料、『解体学語箋』（1871）には、「corium真皮」とある。沈国威1997「近代漢字学術用語的生成与交流—医学用語篇（2）」（『文林』31号）では、「真皮」という

語が明治以後の新造語で後に中国に伝わったと述べているが、さらに考証する必要があるかと思われる。

“皮膜”一詞原意為“薄皮”、見于《齊民要術》、《朱子語類》等書。耶蘇會士的教士們用來表示“皮膚表皮”，是旧詞新用。〈中略〉日本明治以後新造了“表皮”、“真皮”，並傳入我國，取代了“皮膜”。

但し、「真皮」はホブソンの使用例が初出かどうか、なお『解体新書』以後の他の医学書を見る必要がある。

5 『解体新書』の使用語彙との比較

『解体新書』について、詳しくは『日本思想大系65洋学下』にある小川鼎三氏の校注や解説などを参照されたい。ここでは、その語彙について見ることにする。一応、前述した『全体新論』の抽出語彙のそれぞれと対応すると思われるものだけ、検討の対象にした。

『全体新論』の抽出語彙の480項に対して、『解体新書』に対応するものが見つかったのは295項である。その他は、叙述内容の精粗の違いにより対応項が見つからなかった。例えば、血液について、『全体新論』では「血論」という一節を設けて、その成分・作用などを割に詳しく記述しているが、『解体新書』には該当する部分がない。逆に、筋肉に関して、『全体新論』には「手肉」「足肉」「胃体肉」などのような部位別の大まかな名称しかないが、『解体新書』のほうは各部位に属する筋をかなり詳しく分けて述べている。

さて、295の対応項のうち、両者の間に類似又は一致項目はどれぐらいあるのか、興味を引くところであるが、表3に示した通り、121項あった（類似項目は1～12番、一致項目は13番以下）。このうち、字面が同じで意味が違っているものは9語ある（【】が付いた語）。

表3：—全体新論と解体新書（重訂版を含む）との一致・類似語彙

番号	全体新論	出自	解体新書	重訂版	現在名日／中
1	馬鐙骨	×	鐙骨		
2	横肉	×	横筋		
3	砧骨	×	キヌタ骨		
4	血管	×	血道、脈管		血管
5	鎖子骨	○	欠盆骨	鎖骨	鎖骨
6	食管	○	食道		食道
7	直肉	×	直筋		
8	椎骨	×	槌骨		

9 脆骨	○	軟骨		軟骨
10 半圈管	×	半規管		半規管
11 小珠骨	×	丸骨	圓骨	丸骨;輪狀小骨
12 淚管骨	×	淚骨		淚骨
13 趾骨	×	足指骨	趾骨	指節骨
14 橫骨	×	橫骨	羞骨	恥骨
15 跟骨	×	踵骨	跟骨	踵骨
16 股骨	×	股骨	股骨	大腿骨
17 坐骨	×	胯骨	坐骨	坐骨
18 脂膜	×	脂膜	脂膜	脂肪膜と細胞膜
19 心胞	×	心胞		心膜
20 胆管	×	胆管		胆囊管
21 淚囊	×	淚囊		淚囊
22 上臂骨	×	膊骨	上臂骨	上腕骨
23 【上顎骨】	×	上顎骨		口蓋骨
24 膈膜	△	膈膜		肺胸膜
25 眼球	△	眼球		眼球
26 胸骨	△	胸骨	臆中骨	胸骨
27 耳鼓	△	鼓膜	耳鼓	鼓膜
28 小腦	△	小腦髓	小腦	小腦
29 精囊	△	精囊	精囊	精囊
30 脊髓	△	脊髓	脊髓	脊髓
31 大腦	△	大腦髓	大腦	大腦
32 頭骨	△	頭骨		腦頭蓋
33 尿管	△	尿道	尿管	尿管
34 淚管	△	淚管		淚管
35 胛骨	△	胛骨		肩甲骨
36 腕骨	△	—	腕骨	
37 【外皮】	△	外皮	総被	外皮
38 【脈管】	△	脈管		動脈

39 【胯骨】	△	胯骨	無名骨	寛骨
40 掌骨	△	掌骨		中手骨
41 【網膜】	△	一	網膜	網膜
42 牙床	○	牙床		齒槽
43 気管	○	気管		気管
44 採聴	○	採聴		聴覚・聴力
45 直腸	○	直腸		直腸
46 葉	○	葉		葉
47 胃	◎	胃		胃
48 医学	◎	医学		
49 飲食	◎	飲食		
50 運動	◎	運動		
51 会厭	◎	会厭		
52 膈	◎	膈		隔膜
53 額骨	◎	額骨		前頭骨
54 牙齒	◎	牙齒		
55 汗	◎	汗		
56 肝	◎	肝		肝臓
57 眼胞	◎	眼胞		
58 胸	◎	胸		胸
59 凝結	◎	凝結		
60 屈伸	◎	屈伸		
61 血	◎	血、血液		血、血液
62 懸雍	◎	懸雍		
63 月行骨	◎	月行骨		
64 肛門	◎	肛門		肛門
65 呼吸	◎	呼吸		呼吸
66 骨節 2	◎	骨節		骨格
67 耳	◎	耳		
68 子宮	◎	子宮		子宮

69 四肢	◎	四肢		四肢
70 週困	◎	週困		
71 受胎	◎	受胎		受胎
72 消化	◎	消化		
73 耳輪	◎	耳輪		耳介
74 唇	◎	唇		唇
75 心	◎	心		心臟
76 腎	◎	腎		腎、腎臟
77 津液	◎	津液		
78 人中	◎	人中		人中
79 耳竅	◎	耳竅		一
80 髓	◎	髓		骨髓
81 精	◎	精	精・精液	精液
82 脆軟	◎	脆軟		
83 臟腑	◎	臟腑		
84 胆	◎	胆		胆囊
85 胆汁	◎	胆汁		胆汁
86 腸	◎	腸		腸
87 轉動	◎	轉動		
88 内眥	◎	内眥		内眼角
89 乳	◎	乳		
90 乳汁	◎	乳汁		
91 乳頭	◎	乳頭		
92 溺〈尿〉	◎	尿		
93 腦	◎	腦		腦
94 腦髓	◎	腦髓		腦髓
95 喉	◎	喉		喉
96 肺	◎	肺		
97 鼻準	◎	鼻準		
98 鼻梁	◎	鼻梁		

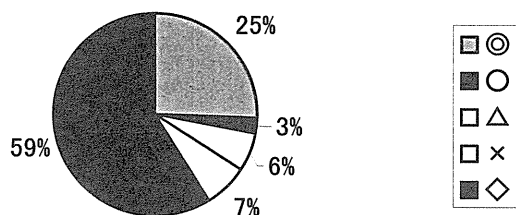
99 脾	◎	脾	脾
100 肘骨	◎	肘骨	
101 眉頭	◎	眉頭	
102 皮膚	◎	皮膚	皮膚
103 皮毛	◎	皮毛	
104 胞衣	◎	胞衣	胎盤
105 膀胱	◎	膀胱	膀胱
106 骨	◎	骨	
107 膜	◎	膜	膜
108 臉	◎	臉	
109 眉	◎	眉	眉
110 咽喉	◎	咽喉	
111 眼	◎	眼	
112 目	◎	目	
113 涙	◎	涙	涙
114 脇骨	◎	肋骨	肋骨
115 皆	◎	皆	
116 顴骨	◎	顴骨	頬骨
117 髀骨	◎	髀骨	大腿骨
118 【筋】	◎	筋	靱帯・神経
119 【動脈】	◎	動脈	
120 【血脈】	◎	血脈	血脈
121 【精液】	◎	精液	

両者の対応語彙及び類似・一致語彙の内訳は下記のとおりである。

表 4：一全体新論と解体新書（重訂版を含む）に於ける使用語彙の対応状況

出自	対応項	類似・一致項
◎	99	75
○	16	8
△	38	18
×	142	20
計	295	121

< 図示 2 >：対応項に対する類似・一致項目の割合



(傍注：◇印は295の対応項のうち、類似・一致しない174項を示す。なお、上記表3、表4、図示2における◎、○、△、×印の意味は前文参照。)

5-1. 在来語との関係

両者に共通している用語の大半は在来の漢方医学以来の用語である。「手」「足」「眼」「鼻」「肺」「心」「四肢」などごく基礎的な語が多く、これが同じ漢字表記を有しているのは、当然と言えば当然であるが、それだけではなく、漢方医学以来の在来の用語を多く使用せざるを得ない別の事情もあったようである。

『解体新書』の訳業に際し、「蓋蘭書之所難解者、不過十之七。而漢説之所可採者。則不過十之一耳。」とは玄白が慨嘆したものの、実際の訳語の面では、どうしても従来の漢方の用語を多く温存せざるを得なかった。その心境は、玄白自身が『蘭学事始』に述べたこともあるし、後の大槻玄沢の述懐からも看取できる。

この志ゆゑ、この訳をいそぎて早くその大筋を人の耳に留まり解し易くして、人々これまで心に得し医道に比較し、速かに暁り得せしめんとするを第一とせり。それゆゑ、なるたけ漢人称するところの旧名を用ひて訳しあげたく思ひしなれども、これに名づく

るものとかれに呼ぶものとは相違のもの多ければ、一定しがたく当惑せり。

(蘭学事始・卷下)

本朝西洋医書翻訳之業、以本編為権興也。〈中略〉内景名物、漢人所未説。而不可以漢名直訳者、皆出于新訳。然吾儕為医業、從來奉漢唐方法、均是薰陶其諸説者也。而今更創新訳之業、專欲補其闕、則豈悉廢其旧為得耶。然若其名物、逐一從彼原称下訳、則觀者不唯不得遽弁識之、又為可解不可解一種異説、以至俾徂往者裏足也。故務以蹈襲旧称。其無可當者、姑且仮借他義、以為之訳。是以有回護古經者焉、有牽強旧説者焉。要取令人意易会也。

(重訂解体新書・付録下)

要するに、やむを得ず在来の用語を取り入れたのである。これは前述したホブソンの流儀と違う。語彙の量からみれば、結果的には、『全体新論』と『解体新書』にはともに多くの在来語が使用されているのであるが、ホブソンは比較的積極的に在来の用語を用いるのに対して、玄白らは意識的に在来の用語を排斥しているのである。

5-2. 語彙の伝承関係

5-2-1. 『全体新論』と『解体新書』における新漢語の一致

前節で述べた『全体新論』と『解体新書』における在来語の一致は、同じ漢字表記を有することに因んだ偶然の一致である(ある意味では必然であるが)と解釈できる。

次には、新漢語である可能性がある語彙の一致を見ていきたいと思う。

前掲の表3のうち、13～46番の34語がそれである。

趾骨 横骨 跟骨*5 股骨 坐骨 脂膜 心胞 胆管 涙囊 上臂骨 上顎骨	×11 語
膈膜 眼球 胸骨 耳鼓 小脳 精囊 脊髓 大腦 頭骨 尿管 尿管 胛骨	
腕骨 外皮 脈管 脛骨 掌骨 網膜	△18 語
気管 直腸 採聴 牙床 (肺)葉	○5 語

「上顎骨」「外皮」「脈管」「脛骨」「網膜」の五語は、『全体新論』と『解体新書』における意味が違うので除外する。以下、残りの29語について見ることにする。『全体新論』及び『解体新書』における各語の使用例は下記の通りである(全体新論の例はa、解体新書の例はb、重訂解体新書の例はbbで示す)。

- (5) a趾骨、每脚十四枚、以大趾骨為至大、部位骨数、如手之指、但手足功用不同、故指趾長短各別也。 (尻骨盤及足骨論)
- b趾、其数五。趾骨及び關節並爪、詳見第五篇。 (外形部分篇第二)
- (6) a左右脛骨二個、人身衆骨、惟此骨最寛大、左右兩片、兜彎於内、上寛下窄、以

- 貯臟腑、左右出一橫骨、在前陰之上分界、俗名交骨。 (尻骨盤及足骨論)
- b前曰橫骨。有二竅。形如卵。每竅入二蛮度也。 (卷一·骨節篇)
- (7) a指骨与臂骨平排而出、股骨与肱骨直下而生、至脚骨即曲扁而貼地、非直立不能。 (尻骨盤及足骨論)
- b膝蓋。在股骨与内肱骨相接處之上面。 (卷一·骨節篇)
- (8) a凡坐之時、此骨乘於椅上、故名坐骨。 (尻骨盤及足骨論)
- b 坐骨兩孔 按坐骨直訳名而即 骨者也。
- (9) a外皮之裏、俱有肥網脂膜、状如小孔聯結、彷彿網眼、其用所以使渾身連貫円滿、若久病則肥網消滅、筋骨現露、乃僅存皮肉耳。 (身体略論)
- b其次者脂矣。自如油。在薄膜為細囊內。名脂膜。 (卷二·頭並皮毛篇)
- (10) a心者、運行衆血之府也、位處胸中、左右有肺、周圍夾膜裏之名曰心胞。 (心經)
- b心胞。二襲而有光沢之膜也。以之裏心。 (卷三·心篇)
- (11) a有胆管二支、一透小腸頭、一透胆囊。 (肝經)
- b肝胆管。是胆汁從肝所出之所也。
- 胆管。是胆汁直從胆所出之處也。 (卷四·肝胆篇)
- (12) a近鼻處有淚囊、如小豆大、囊下有單管通鼻。 (眼官部位論)
- b內眥者。大也。謂之目府。淚機里爾。及二淚点之類俱屬淚囊。連淚骨。而貫弓樣軟骨。直入鼻中。 (卷二·眼目篇)
- (13) a 左右上臂骨各一枝、古名臑骨、亦名肱骨。 (手骨論)
- b 臑骨 (按据原名、当訳曰上臂骨、今取其易曉、從漢名云) (卷一)
- (14) a大凡呼吸之時、胸肋舒張、膈膜鼓動、諸臟相隨以応之、膜沫濡潤以助之。 (肺經)
- b 橫膈膜、向胸骨著季肋与椎骨。 (卷三·胸並膈膜篇)
- 縱膈膜、二襲而共循胸骨之裡。 (同上)
- (15) a 眼白殼 其円如球、眼球本有三層、此乃第一層。 (眼官部位論)
- b 眼球全形 (眼目篇図)
- (16) a 胸骨寬約寸余、長約四寸、与脇端粘聯。 (脊骨脇骨等論)
- b 胸骨。肋骨不至于此者。向胸見之。則或一二不過三。 (卷三·骨節篇)
- (17) a 其膜有兩層夾疊、乃外竅之皮、及中竅之衣、相倚而成、斜入向裏、外凹內凸、西国稱為耳鼓、因其捫閉如鼓也。 (耳官妙用論)
- b 耳鼓 薄膜緊張、為聆隧極底、又名之曰鼓膜。

- (18) a 枕骨里面有四微凹处、其形如盆、近髓孔後之兩大盆、乃盛小腦者、略上之兩小盆、乃盛大腦之後葉者也。 (全身骨体論)
- b 小腦 (按即後腦)、在本腦之後
本腦 (按即前腦、又名大腦)
- (19) a 循行至膀胱之底、即成一精囊、囊長一寸五分、大如小指。 (外腎經)
- b 精囊。親在膀胱之囊口後。是主儲精及射出其精。 (卷四・陰器篇)
- (20) a 脊髓者、由大小兩腦直生而下、為腦之余、(中略) 西国医士剖開脊骨考驗、見胞膜三層、膜内有清水環護脊髓、髓質与腦質同類、比手足骨内之髓、大相径庭、亦謂之髓者、蓋中土無名、不得不沿其旧耳。 (腦為全身之主論)
- b 脊髓神經。從之起者。左右各三十矣。 (卷二・腦髓並神經篇)
- (21) a 茲論人身全骨、必先分頭身手足六骸而列言之。頭部則分頭骨面骨二者。 (全身骨体論)
- b 頭骨。分之則頭蓋与顎也。 (卷一・骨節篇)
- (22) a 尿管直透腎内、成一尿囊、様如酒漏。 (内腎經)
- b 尿管 膀胱涎長而為管者是也。
- (23) a 眼淚核 銳眦之骨 辺、有核一顆、其質非脂非肉、長約五分余、闊約三分半、上凸下凹、有淚管七條、透出上胞之裏。 (眼官部位論)
- b 示淚管及機里爾 (眼目篇図)
- (24) a 手腕骨左右各八枚、其形長短方円不等、上連肘骨、下聯掌骨。 (手骨論)
- b 掌骨者。小而其數四。 (卷三・骨節篇)
- (25) a 行年三歳、共有二十齒、俗名乳牙、其 不深、因小兒牙床短窄、未能位置多牙。 (臟腑功用論)
- b 蓋牙床者。從上下顎出。其挿于此者。三十二齒也。 (卷一・骨節篇)
- (26) a 因与食喉逼近、長四寸許、分岐為二、名曰氣管。 (肺經)
- b 上為氣管。從喉頭起。与食道並。經頭茎。直連肺。 (卷三・肺篇)
- (27) a 耳者、採聽之官、中有機竅、以接声氣。 (耳官妙用論)
- b 夫耳者。採聽之具也。 (卷二・耳篇)
- (28) a 大腸者伝道之官、(中略) 下廻至脾下、從左軟脇斜落至肛門、乃直腸也。 (大腸經)
- b 直腸。直從腰下至肛門。其長無過二手也。 (卷三・腸胃篇)
- (29) a 肺為呼吸之經、(中略) 葉右三左二、披離下垂。 (肺經)
- b 裏肺之兩大葉者。縱膈膜也。 (卷三・肺篇)

5-2-2. 既出語

上記の29語のうち、『大漢和辞典』や『漢語大詞典』に出典指示などがなく、新造語かと疑われる例も、調査を進めてみると、洋学書関係以外の漢籍に既に使用されていたというものがある。ここで、仮に「既出語」と呼ぶことにする。「横骨」「心胞」「脂膜」は前述した通りである(第二章第二節参照)。「直腸」「気管」もその類である。

(30) 直腸 [応的斯低奴斯列古 模] 羅 [列吉的達 模] 蘭 按、[列吉斯] 者、直也。此以其直下肛門也。此物特与漢名符合。又一名終腸。(重訂改訂新書・名義解)

(31) 気管(直訳) 〈中略〉即漢所謂気管也。(重訂改訂新書・名義解)

このほか、「趾骨」「掌骨」「腕骨」「胛骨」などは未確定であるが、既出語である可能性が高い。

5-2-3. 中国初期洋学書の語彙との関係

4-2節で言及した『泰西人身概説』『人身図説』『五臓軀殻図形』といった早期中国洋学書は「中国では殆ど読まれず、また日本に舶載されることもなかった」ようである⁶。従って、その語彙が『解体新書』の訳語に影響したかどうか、なお、両者を照合する必要があるが、恐らく直接影響はないだろうと思われる。

後に、師命を受けて『解体新書』の改訂を行った大槻玄沢は、その『重訂解体新書』の附録に次のように述べたことがある。

漢人先我及西洋之事者、如西方要記是也。〈中略〉又劉氏曰、鄧玉函善其国医。〈中略〉医学亦謂有用之者、意當有其成訳之書也。奈余之固陋僅得方密之物理小識、王惠源医学原始等耳。是二百年前先我所発而得其実者也、不為不多矣。然本所取于重訳、而非就彼書訳之者、則未免隔一層而觀焉。(附録・下・五ウ～八オ)

「意當有其成訳之書」と、中国には医学関係の翻訳書も既にあったはずだろうと推測しているながら、それを自分らが目にすることがなかったという由である。

私は、この度、関西大学教授沈国威氏より、北京図書館所蔵の清抄本『泰西人身説概』のオリジナルコピーを拝借して披見する機会を得た。ここで沈先生のご好意に心からお礼を申し上げる。その医学語彙は、「手」「足」「眼」「鼻」「肺」「心」「四肢」などの基礎的な語のほか、『全体新論』と一致したものは、次のような語がある。

圓紋肉(「肛門括約筋」のこと)、気管、隔膜、食管、脆骨、手骨、足骨、大腿骨、小腿骨、手掌骨、腕骨、臂骨、頭骨、枕骨、背骨、尾骨、膝蓋骨

そして、『解体新書』(重訂版を含む)との類似または一致したものは、
 気管、膈膜、頭骨、脳髓、犬牙、水晶汁(水晶液)、水汁(水様液)
 篩子骨(篩骨)

などである。このうち、「脳髓」だけが在来語である。「気管」が前述した通り、既出語である。しかし、「犬牙、水晶汁(水晶液)、水汁(水様液)、篩子骨(篩骨)」などはいずれも当時の新造語と思われる。例えば、「犬牙」に関する記述では、

(32) 虎牙四、上下各二、居于四処、西国名犬牙。(泰西人身説概・卷上)

と、明確にこれは西洋の呼称であることを断っている。

玄白、玄沢らが『泰西人身説概』を見なかったので、これは単なる偶然の一致に帰せられようであるが、或いは、これらの語を流用した他の中国人著作から間接に借用した可能性もあるとも考えられる。玄白、玄沢らが参考にした書物は方以智の『物理小識』と王恵源の『医学原始』などである。このほかに、湯若望の『遠望鏡説』、熊三拔の『泰西水法』などの中国早期洋学書も参考にした。

又如方密之物理小識、王恵源医学原始、略据西説而論説者。苟有一節之長、羽翼本説者、抄以收諸名義解中、冠曰方氏王氏者是也。又有採散見明季以降群書中者、以為引証者、特曰西洋訳説、不必举書名及姓氏者、省其煩也。(重訂解体新書)

方以智^{*7}の『物理小識』や王恵源の『医学原始』などにおける記述も、西洋医学に基づいているものである。これらの書物における語彙と『解体新書』及びその重訂版の語彙との比較は、舒志田2003などで既に考察していた。結論だけを言うと、上記語彙のうち、

横骨 直腸 心胞(絡) 脂膜 気管 胸骨 股骨 耳鼓 隔膜 脊髓 葉
 などは『医学原始』などの中国初期洋学書を通じて日本語に移入された可能性が高い。

5-2-4. 直訳による一致の可能性

モリソンの辞書には、「BREAST BONE 骨、胸膺骨」とあり、この「膺」は「胸」の異体字なので、「膺骨」は即ち「胸骨」のことである。モリソンの辞書は当時、最も優れた辞書の一つであるし、まして、本書の著者ホブソンは彼の娘婿でもあるから、本辞書の訳語の利用もごく自然に考えられるだろう。そして、『解体新書』における「胸骨」との一致は同じ漢字表記による直訳の結果とも考えられる。「股骨thighbone」、「眼球eyeball」も同様に想定できる。但し、「胸骨」「股骨」は前節で分かるように『医学原始』からの影響とも考えられる。

ここでは、「眼球」を一つの例としてもう少し見ていこう。『大漢和辞典』では用例が挙がっておらず、『漢語大詞典』には現代語の用例しかない。『全体新論』以前の中国側の用

例は、私の調べる限り見出せない。『全体新論』に「眼官部位論」という一節があり、「眼眉—眼胞—左右入涙管—眼淚核—單睛皮—明角罩—眼白殼—血絡黒油衣—隔簾—脳筋衣—睛珠—前房水後房水—大房水—牽睛肉—目系—眼骨—眼全球」と、順次に述べている。「眼球」の用例は前掲した例17)aのほか、次のような例がある。

(33) 目系 (中略) 眼球向外、平正相對。

(34) 脳筋衣 位在眼球之内、為第三層。

(35) 眼白四圍、有牽睛直肉四片、皆前連眼球外半、尾連骨 之内。

一方、英華・華英辞書類では、ロブシャイドの字典にeye-ballの訳語として、始めて「眼球」が登場している。

eye-ball 眼睛珠 (モリソン1815-22)

eye-ball 目眶、目眇、目睛、眇珠、目眸、眸子 (メドハスト1847)

eye-ball 眼球、眼睛、眇、目珠 (ロブシャイド1866)

ロブシャイドが利用したと言われる『英和对訳袖珍辞書』では「eye-ball 瞳子」となっており、「眼球」の訳語はない。従って、この「眼球」の訳はホブソンの用語の踏襲か、或いは『解体新書』などの日本医学書からの直接影響かもしれない。

もっとも、前記した30語は、蘭訳の場合、「採聴」「膈膜」「脂膜」「涙管」「尿管」「大脳」*⁹などを除いて殆ど直訳である。しかし、直訳だからと言って、直に偶然の同形(又は類似)に帰せられるのは些か性急であるように思われる。直接又は間接的な影響の可能性を排除した上で始めてそう断定することができる。

次節では、近世日本の洋学から中国後期洋学書への影響、具体的に『解体新書』(重訂版を含む)から本書への語彙面の影響を探りたい。

5-2-5. 近世日本の洋学から中国後期洋学書への影響か

本稿これまで述べてきたように、『全体新論』と『解体新書』(重訂版を含む)における新漢語の一致及び類似は、仮に同じ中国早期洋学書からの影響などを考慮に入れても、なお説明がはっきりつかないところがある。

【X】眼球、採聴、精囊、大脳、小脳、牙床

涙囊、涙管、胆管、尿管、坐骨、上臂骨

杉田玄白がなぜ『解体新書』を漢文訳したか、その理由について、彼自身は『和蘭医事問答』(寛政7年)の中でかつて言及したこともあるし、後に、大槻如電もその漢文体翻訳の趣旨について述べたことがある。

是は乍不及運に叶ひ、唐迄も渡候ば、其節之為にと存、唐音書に仕候。

（和蘭医事問答・213ページ）

曾聞。杉田先生之訳定解体新書。意在執和蘭実験説。一洗医風。然不翻以国文。而漢文記之。如彼。抑亦有説。医家皆奉漢法。非革其根底。則不能果其志。其訳用漢文。望伝之支那。而警覚彼土医林也。後年。英国合信氏。著全体新論亦此意。先生先之殆百年。

可謂遠旦大矣。

（磐水漫草）

つまり、漢訳を用いた理由の一つとして、これが中国に伝わって、中国人にも読んでもらいたいと望んでいたからである。『解体新書』は中国の知識人または中国に居た外国宣教師らに読まれたかどうか、今後、更に書物や人的交流史などの面から考証する必要がある。ここで、『解体新書』の語彙が少数ながら、ホブソンの『全体新論』に取り入れられたというような即断は避けたいが、少なくとも、明治維新以前にも西洋宣教師らを通じて、いくつか日本製新漢語が中国に移入された可能性がある」と提示したい。事実、当時中国に居た宣教師たちが西洋の書物を中国語に訳す際、和英・英和辞書などをも参考にしたことがある。これは、十九世紀半ば頃、中国で最も有名なMission Pressの一つである「美華書館」についての次のような館誌からでも分かる。

上海小東門外之美華書館、西国排印活字版書之館也。初以排印美国書籍及中華字書籍故名曰美華。〈中略〉。所印西国翻譯中国之書、其翻譯之字典有数種、一為中国字正文西国字翻譯【筆者注：華英辞書類】、一為日本国字正文法国字翻譯【日仏辞書】、一為英国字正文日本字翻譯【英和辞書】、一為日本国正文英国字翻譯【和英辞書】。

これは同治十年（1871）第15期の『教会新報』に掲載された「美華書館述略」という文章から摘録しものであるが、宣教師らが西洋の書物を中国語に翻訳する際に使う辞書類について述べている部分である。これによると、彼らは当時、華英・日仏・英和・和英の四種類の辞書を利用したらしい。華英辞書類はモリソン、メドハスト、ロブシャイトらの華英字典であろう。日仏辞書は恐らくパジェスの『日仏辞典』（1862-68）であろうと思われる。英和辞書は、当時まで主なものとして本木正栄らの『諳厄利亜語林大成』（1814）、メドハストの『英和和英語彙集』（1835）、堀達之助らの『英和对訳袖珍辞書』（1862）などが挙げられる。また、和英辞書として、前記メドハストの語彙集以外に、ヘボンの『和英語林集成』（1867）がある。

但し、ホブソンの『全体新論』の初版の出版元は、当時、美華書館と名を並べるもう一つの中国プロテスタント伝道印刷所の「墨海書館」である。しかし、上記のような翻訳事情は恐らく同じであろうと思われる。

要するに、十九世紀半ば頃、当時中国に居た宣教師らの翻訳書の語彙には、日本語からの影響が可能性としてはあると考えられる。

さて、『全体新論』の語彙の検討に戻るが、もし、そこに日本語からの影響があるとすれば、同種類の日本側の医学書はさておき、まず辞書類として、『語厄利亜語林大成』と『英和英語彙集』が考えられる。しかし、私が調べたところ、この両辞書には、「頭手足口鼻脳」など人体に関する在来の基礎的な語彙のほか、

caul網膜、外科、食指、板齒、gristle軟骨、heart心臓、joint骨節、limb関節、kidney腎臓、liver肝臓、lung肺臓、marrow髓（骨中脂）、midriff横隔膜、milt脾臓、purblind近視、腸部膜、sinew神経（人身中所在コレアリ蓋シ視聴言動痛痒寒熱ヲ知覚スル処ノ経ナリ）、vein脈管

などの新漢語らしいものもあるが、【X】の語彙との一致は一語もないので、『語厄利亜語林大成』又は『英和英語彙集』からの影響の可能性は排除できる。とすれば、やはり日本側の医学書からの直接影響なのであろうか。「半島」の例で分かるように、たった一語の類似でも、その裏には様々な語彙交流の史実が潜んでいる。これだけ数ある語の類似は到底、ただの偶然とは思えない。但し、人的または書物交流面からの確証が得られない限り、まだ何の結論も得られない。

6 まとめ

以上、『全体新論』の語彙を『解体新書』のそれと対照しながら、主に語彙伝承の面から検討してきた。両書の語彙の間に見られる一致は、多くは在来の漢語または同じ漢字表記に由来するものの、中国早期洋学書からの影響によるものもあると思われる。一方、これらの可能性を排除してからもなお説明の付かないものがある。

ここで、5-2-1節で検討した29語を語彙伝承の観点から改めて整理すると、次のようになる。

<既出語>

横骨、気管、脂膜、心胞、直腸、頭骨、跟骨 — (確定)

趾骨、掌骨、腕骨、胛骨 — (未確定)

<中国初期洋学書の影響か>

横骨、気管、脂膜、心胞、直腸、葉、脊髄、膈膜、股骨、胸骨、耳鼓

<不明>

眼球、採聴、精囊、大脳、小脳、牙床、涙囊、涙管、胆管、尿管、坐骨、上臂骨

この不明のものは、あるいは日本側の医学洋学書からの直接影響である可能性もあると、提示したい。人的・書物交流面からの更なる検証が必要であるが、日本製新漢語の中国への逆流の時期を再考させられる一つの事実であろうと言えるのではないかと、思う。

なお、ここで挙げた語彙についての個別の詳細論は別の機会に譲りたい。また、「直訳」を

含めた翻訳法などの視点からも、もう一度、『全体新論』と『解体新書』との使用語彙についての対照研究を行う必要があるが、今後の課題としたい。

参考文献 :

- 荒川清秀1997 『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』 白帝社
- 大庭 脩1967 『唐船持渡書の研究』 関西大学東西学術研究所
- 小川鼎三1983 『医学用語の起り』 東京書籍
- 高名凱等1958 『現代漢語外来詞研究』 文字改革出版社、北京
- 高名凱等1984 『漢語外来詞詞典』 上海辞書出版社
- 酒井シズ1998 『新装版解体新書』 講談社学術文庫
- 佐藤喜代治1971 『国語語彙の歴史的研究』 明治書院
- 佐藤 亨1980 『近世語彙の歴史的研究』 桜楓社
- 佐藤 亨1986 『幕末・明治初期語彙の研究』 桜楓社
- 杉田玄白著・緒方富雄校注 『蘭学事始』 岩波書店、1984年4月第31刷
- 杉本つとむ1981 『杉本つとむ日本語講座 蘭語学とその周辺』 桜楓社
- 杉本つとむ1997 『解体新書の時代』 早稲田大学出版部
- 杉本つとむ1998 『杉本つとむ著作選集 近代日本語の成立と発展』 八坂書房
- 瀧浦文弥1938 「全体新論に就て」 『開化』 第2巻第7号
- 沈 国威1994 『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容』 笠間書院
- 沈 国威2000 「『泰西人身説概』から『全体新論』まで——西洋医学用語の成立について」
『関西大学中国文学会紀要』 第21号
- 陶 惠寧2000 「『重訂解体新書』所引の『医学原始』について」 『日本医史学会雑誌』
- F. Masini著・黄河清訳1997 『現代漢語詞匯的形形成——十九世紀漢語外来詞研究——』 漢語
大詞典出版社
- 中山 茂1992 「近代西洋科学用語の中日貸借対照表」 『科学史研究』 □-31
- 方 豪 『中国天主教史人物伝』 台中光啓出版社 (中華書局1988年影印)
- 森岡健二1991 『改訂近代語の成立——語彙編』 明治書院
- 八耳俊文1995 「清末期西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録」 『化学史研究』 vol.22
- 洋学史研究会1991 『大槻玄沢の研究』 思文閣出版
- 吉田忠・李廷挙編1998 『日中文化交流史叢書』 大修館書店
- 吉田 寅1993 『中国キリスト教伝道文書の研究』 汲古書院

舒志田2003 「『性学粗述』の語彙と日本の近代漢語」 ソウル国際シンポジウム・漢字文化圏における近代語の成立と交流・2003年3月

注：

*1 アメリカ合衆国 Lehigh 大学に所蔵されている『英和対訳袖珍辞書』にロプシャイドの自筆書きこみが確認されていることなどから、ロプシャイト字典における peninsula の訳語である「半島」は、堀達之助の辞書からの影響だという。荒川清秀 1997pp.21-22, 69, 133 を参照。

*2 瀧浦文彌「全体新論に就て」『開化』第2巻第7号、1930年,pp2-3.

*3 吉田寅 1986「中国医療伝道とホブソンの中国医学書」。

*4 『泰西人身説概』に「脆骨」「膈膜」の使用例が確認されている。沈国威 2000 参照。

*5 「跟骨」は海山仙館叢書本の挿絵にだけ見える。同叢書本の挿絵が『全体新論』初版本のそれと一致しないものが多いので、ホブソンの用語でない可能性が高い。一応、参考のために挙げておく。

*6 沈国威 2000「『泰西人身説概』から『全体新論』まで—西洋医学用語の成立について」『関西大学中国文学会紀要』第21号。

*7 清の徽州（今の安徽省）桐城の人、字密之、号鹿起。清世祖の順治（1644-1661）年間に在世。

*9 「大脳」は「小脳」の対として作られたと考えられる。